

特集

# フィリピンの経済成長とその光と陰

フィリピンの好調な経済成長が、昨年来、世界銀行をはじめとする経済界やメディアで話題になっている。株価は市場最高値を更新し、2012年度の成長率は東南アジア最大の6.6%に達した。1200万人に及ぶ海外就労者からの送金も過去最高額となり、国内総生産（GDP）の13%を占めた。

中国・インドに次ぐ、これからのアジア新興国としてVIP（ベトナム・インドネシア・フィリピン）という新語も登場した。この成長の要因のひとつに、若い人口構成があげられている。65歳以上は人口の5%というフィリピンは、2050年にアジアで唯一、高齢化社

会に入らない国になるといわれている。これまで「アジアの病人」と表現されてきたフィリピンだが、この経済成長の背景で、何が起きているのか？豊富な若い労働力の実態は？成長の影で農村や都市の格差がどのように生まれているのか？

今回の特集は、アジア開発銀行（ADB）で14年間の仕事を経て、その後フリーのエコノミストとして活躍するマニラ在住の伊藤徹氏のお話を中心に、日本のメディアからは知ることのできない、フィリピン経済成長の「光と陰」について、現状を話し合った。

（編集部）



バコロド市内のモールで。曜日を問わず買い物の客でにぎわう。

Relay Essay

ポコポコ poco-poco

20

## コーヒーで息の長い関係を

箕曲在弘／みのお・ありひろ

東洋大学社会学部社会文化システム学科 助教、(株)オルター・トレード・ジャパン ラオス事業アドバイザー



2012年12月、4カ月ぶりにカトゥアット村（ラオス・チャンバサック県バクソン郡を訪れた。（株）オルター・トレード・ジャパン（ATJ）は2004年からこの村のコーヒーを買い続けている。私も2008年からこの村で調査するようにになり、村を訪問するたびに必ず生産組合長であるソンブーン氏のもとを訪れ、近況を伺うようにしている。

すでに60歳を超えているが、衰えた様子を見せず、いつも冗談を交えながら大声かつ早口で捲し立てるソンブーン氏の話っぷりは、一度聞けば忘れることがないほど印象深い。今回、私は彼の自宅での今年の収穫の状況について尋ねていたが、という話の流れだったか、先日、ラオスの大統領と首相の両名から賞状と勲章をもらったと教えてくれた。

国家から表彰されるほどの人物であるが、ソンブーン氏は決してエリート家庭に生まれたのではない。生まれながらに父親の顔を知らない彼は、母親の手で育てられ、学校を出た後は軍隊に入った。内戦終結後、思想教育施設に送り込まれたが、そこから逃げ出し、身

を隠すためにカトゥアット村の女性と結婚した。

そんな彼は妻の親類以外に家族と呼べる者がおらず、さらにその親類から譲り受けた土地しかないため、農村では厳しい生活を強いられた。だが、彼の転機はオックスファムがこの村の支援を開始した2003年に訪れた。この時、彼は少し英語を話せるという理由で、村のコーヒー生産組合の組合長に選出されたのだ。その後、ATJがこの組合から豆を買付けたことにより、「日本と取引している村がある」と周囲で評判になり、持ち前のハングリ精神も手伝って、彼はみるみる地元で有名な農民となった。

「昔は葦葺屋根の高床式家屋だったが、日本に豆を売るようになつてこんなに大きな家が建った」。彼は煉瓦造りの立派な家を指さしながら、私にATJとの取引に感謝する言葉を述べた。ATJはラオスの組合との取引において、このソンブーン氏という、不利な立場におかれつつもバイタリティーあふれる類稀な人物を長期的に支えてきた。このような関係を築く買取こそが、いま求められている。■

「ポコポコ」は「サンゴ礁の満潮」をイメージしています。潮が満ちていくにつれ、サンゴ礁のあちこちに「ポコ」（水たまり）が現れて、ポコポコ同士がつながり始め、いつのまにか一面海になるというイメージです。アジアの各地域で「ポコ」が生まれ、気がつけばつながっているような活動をしていきたいという思いがこめられています。

## CONTENTS ■ HALINA 20 2013.05.01

|    |                                                                                                                                                                     |
|----|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 02 | Relay Essay ポコポコ② コーヒーで息の長い関係を◎箕曲在弘                                                                                                                                 |
| 03 | 【特集】フィリピンの経済成長 その光と陰<br>大野和興、市橋秀夫、伊藤徹、大橋成子、堀田正彦、堀 芳枝、秋山眞兄、吉澤真満子、赤石優衣                                                                                                |
| 8  | 【Topics】これから生きるために学んだこと——日本とネグロスの若手農民の交流◎吉澤真満子                                                                                                                      |
| 10 | 【Column】Kakao Kita カカオ民衆交易奮闘記② 「カカオ・キタ」加工チーム結成◎津留歴子<br>マイストーリー in ジャパン⑧ 【中国（朝鮮族）】金 銀実さん<br>微笑みの国から② きれいごとだけでは済まない。けれど…◎平河 夏<br>アジア現代文学あれこれ② 『ここにも激しく躍動する心臓がある』◎大野和興 |
| 12 | 撮っておきアジア② モンゴル国◎黒澤 諒                                                                                                                                                |
| 13 | APLA生活② オーガニックコットン・足底バイル靴下◎渡邊真紀湖                                                                                                                                    |
| 14 | 【Voice from APLA partners】<br>【東ティモールより】「協同」についてのセミナーを開催                                                                                                            |
| 14 | 追悼 村井吉敬さんを偲んで◎秋山眞兄                                                                                                                                                  |
| 15 | 事務局だより                                                                                                                                                              |

## 表紙のことば

そこに織り込まれるのは、60年もの涙と嗚咽だろうか。インド・ビルマ国境でナガ民族の女たちが手織りに込める、切なる思い。それは「勝利」や「民族の尊厳」などではなく、ただただ愛しい人々の生還ではなかったか。

山岳地帯を風のように駆け巡る、ナガの男たち。しかし彼らのショールは、次々と血に染められていく。イギリス、日本、そしてインド、ビルマ。彼らの地ナガランドを踏みにじる者たちへの抵抗の叫びは、世界の誰にも顧みられないまま、いつもこの織布とともに葬り去られてきた。

軍事制圧が続く村々で、女たちはいまでも織り続ける。施されているのは、焼き畑や狩猟、精霊信仰によって育まれた意匠。そこに平和への感謝が込められる日は、まだおとずれない。羽織ると、ずっしりとした暖かさが優しい。そして、そっとささやきかけるのだ——「生きて、帰ってきて」。

はえじま わたる  
（南風島 渉／報道写真記者）



マニラ空港周辺でも建設ラッシュ。



「派遣切り対応国家」。海外出稼ぎに關しても、

堀 ◎「派遣切り対応国家」とは面白い表現だと思う。安くて若い労働力が常にあふれていて、募集しても派遣切りしてもいくらでも労働力は集る。こうした構造で成り立っている。フィリピン労働運動が強い時代は、安い賃金を求めて資本は中国へ一斉に進出したが、

その後、中国の件費が3〜6倍になり、フィリピンより高くなった。反日運動もあった。こうした背景から日本企業のフィリピンへの再投資が始まっている。カラバールソン開発エリアでは工場団地がいったいになって、エリアを拡大する予定と聞いた。

健康障害、非行につながっていると専門家は警笛を鳴らしている。ちなみに、今年の世界銀行・世銀開発報告のテーマは「仕事」。報告書は、経済が仕事を通じて「生活水準の改善」や「社会の一体性」をもたらすことを指摘したうえで、成長戦略を補う「仕事戦略」の必要性について説いている。世界的な不況で多くの企業がコスト削減に邁進するなかで生まれた新たなビジネスモデルや雇用機会によつ

て後押しされた、正にグローバル経済の産物ともいえるフィリピンの経済成長が人びとの暮らしや社会にどの様な変容をもたらしたのかという点は、生産性の動向と共に、成長の質や持続可能性について考えるうえで重要な要素と考えられる。

### グローバル化を「賢く生きる」

堀 ◎新自由主義を批判するとき、欧米・日本の多国籍企業がアジアなどの安い労働力を使って製品を輸出し、利益を上げていることを問題にするが、こうした流れに順応しつつ、もっともグローバルゼーションを賢く生きているのがフィリピンだと思う。

堀 ◎「派遣切り対応国家」とは面白い表現だと思う。安くて若い労働力が常にあふれていて、募集しても派遣切りしてもいくらでも労働力は集る。こうした構造で成り立っている。フィリピン労働運動が強い時代は、安い賃金を求めて資本は中国へ一斉に進出したが、

### 【座談会参加者（発言順）】

**大野和興**／おおの・かずおき  
農業ジャーナリスト、本誌編集長

**市橋秀夫**／いちはし・ひでお  
埼玉大学教授

**伊藤 徹**／いとう・てつ  
エコノミスト。1995年〜2009年までADBに勤務。その後、コンサルタントとして国際開発金融機関の案件立案や独立評価などの仕事に携わる。マニラ在住

**大橋成子**／おおはし・せいこ  
APLA非常勤事務局

**堀田正彦**／ほった・まさひこ  
(株)オルター・トレード・ジャパン取締役。インドネシアでエコ・シュリンプを生産するオルター・トレード・インドネシア社 (ATINA) 社長を兼任。

**堀 芳枝**／ほり・よしえ  
恵泉女学園大学准教授

**秋山眞兄**／あきやま・なおえ  
APLA共同代表

**吉澤真満子**／よしざわ・まみこ  
APLA事務局長

**赤石優衣**／あかいし・ゆい  
APLA事務局



2013年2月22日、座談会の様子。

伊藤 ◎雇用については量だけでなく質的な問題も問われている。例えば、BPOに典型的な就労パターンとして時差のある欧米企業の就業時間に合わせた昼夜逆の労働に起因する不規則・不健康な生活スタイルが若者のストレス増大や

**フィリピン経済は特殊なモデル？**  
大野 ◎僕は専門家ではないが、この間の経済成長の報道を見ていると、「金ど人」が縦横十文字にフィリピンの上を飛び交っていて、そこから何がしかの金がフィリピンに落ちてきている、という構図を描いてみた。そこでいくつかの疑問がわいた。

食料は相変わらず輸入に頼り、モノ作りという国内製造業が圧倒的に少ない。そして日本企業を含めた海外からの再投資が始まっている。はたしてこの成長はバブルなのか。国内のモノ作りがないのに、発展しているのは何故なのか。そしてこの景気は持続するのか。持続するとすれば、国内消費・内需といった国内市場の形成は欠か

せないだろう。その場合、中産階級は成立するのか。市民社会がどう形成され、今後の成長にどう結びつくのか。

大橋 ◎バコロド市ではこの数年で、5社近い欧米資本のコールセンターが登場した。治安が良いというのが理由だが、センターの従業員を狙った深夜の強盗や強姦も増えてきた。一社につき、400〜500人の若者を雇用するが、雇用形態は3〜6ヵ月契約を延長するだけ。しかも英語のできる大学卒に限られるため、農村部の若者に雇用の機会は生まれない。



生きる」フィリピンの一面としてとらえることができる。

**秋山**◎中国の専門家と話をしていたら、遅くても2050年に中国経済は大きな危機を迎えると言われた。決定的な原因は少子化で製造業を担うものが激減するからとのこと。フィリピンは若者がたくさんいるが、他の近代国家とは異なり必ずしも製造業で成長してきただけではない。そうすると今後フィリピンの将来は一体どうなるのか？APLAがつながったきた農村地域づくりとどう絡んでいくのかという問題もある。

**伊藤**◎ADBのレポートはフィリピン経済の発展にはより積極的な外資導入による製造業の育成が不可欠との見方を示している。その根拠として、サービス産業だけでは今後の労働力人口の増加を吸収しきれない点、近隣アジア諸国が製造業の拡大とそれに伴う生産性の向上を通じて高い経済成長を達成した点などをあげている。この見方に関連して二つの疑問を提起したい。一つは、製造業への直接投資がはたして確実に生産性の改善を促すのかという点。生産工程の細分化が進み外注の比重も増すなか、付加価値が低く国内での産業連関効果にも乏しい工程を担ったとして、どれだけ能力向上や技術移転効果が見込めるのかという疑問である。もう一つは、農業とサービス産業に軸足を置いた発展モデルはありえないのかという点。それらの部門の正確なデータを得ることはなかなか困難だが、その伸びし

仕方ないと割り切っている。そこに「農業がね」といっても伝わらない。一方、農村で夢をもって自立した地域を作ろうとしている動きはその地域で完結してしまい、都市までつながらない。そこをどうリンクしていきけるかが課題ではないだろうか。

**伊藤**◎フィリピン政府は、米の国内自給をめざした農業支援やPPP(官民連携)によるインフラ開発を政策の柱としてあげているが、そうした施策が「地域の自立」や「都市と農村のつながり」とどう関係するのか、疑問に思う点もある。例えば、急ピッチで進められた米の増産が農村経済や農業の質にどのような影響をもたらしているのか？PPPによるインフラ開発が、結果としてより多額の政府支出や受益者負担、あるいは地方の切捨てにつながりはしないか？そもそも地域の自立や連携を促すためには、どのようなインフラが必要で、どういった事業がふさわしいのか？これらの問いに対する答えを、農村で暮らす人びとと共に、新しい価値観を持った若い世代の声にもよく耳を傾けながら、

**大橋**◎数年前にネグロス島とルソン島の農民交流があった。フィリピンの穀倉地帯であるルソン島ではネグロスに比べると農民の生活が豊かだけでなく、自信に溢れていた。農業の成功のカギは「人」「土地」「知恵」と教えられ、ネグロス農民は大きな影響を受けた。こうした人と人が出会ったきっかけを創る仕事にAPLAの意義がある。

**秋山**◎APLAとしては、農民たちがフィリピンや世界を取り巻く経済情勢をもっと理解して、そのなかで自分たちの農業や地域づくりにこそ将来がある、という思いを持ってくれることが大切だと思っている。若い農民がしっかりと食べていける道筋をつくり、それに自信をもつことで地域の人びとに

ろは、量的にも質的にもまだ大きいのではないかと感じる。特に農業については、効率化だけでなく、多様化、高品質化、高付加価値化によって輸出促進や輸入代替が期待できる。

マニラで毎週末開かれるファーマーズマーケットの活況は、「良い」農作物や食生活に対する人びとの意識の高まりを示している。スローフードやスローライフといった考え方に共鳴する人が、自分の周辺を見渡してみても着実に増えてきている。特に富裕層出身の若者の中には、高い地位や収入よりも、地域経済や社会への貢献、環境保全を目的としたイノベティブな事業への取り組みに価値を見出す新しい層もはじめている。

**大橋**◎ネグロスでもそれは実感できた。この数年で、海外留学を経験した地主やエリート層の2世・3世たちが、砂糖農園経営だけに縛られず、野菜の有機栽培を売りものにした農場やレストラン、エコ・ツーリズム的なリゾート開発など新しい事業を始めている。

**吉澤**◎その層が誰とつながっている

広げ奉仕していく。それによっていくつものアソシエーションが生まれ、つながっていく。そうした動きを手助けできればと思う。先ほどインフラの話が出たが、ネグロス・キャンペーン時代には特に農地改革でフィリピン政府関係者に直接働きかけるチャネルがあった。今は人脈的に難しくなってきたが、農業のインフラ整備など、どれだけ発言していけるかを課題として考えたい。

**吉澤**◎APLAと一緒に活動する農民や農村は、こうしたマクロ的経済とは無関係ではないのに、実際は取り残されている。しかし地道に実績をつんで農民たちが自信をもっていくことが大切。それがネグロスと25年以上関わってきた成果としてある。今後は若い世代とどう発展させていけるか。カネシゲファームの実践は農場だけで完結せず、それが地域に広がり、新しい地域経済を創りあげる。そうした実例を積み重ねていけば説得力がもてる。また危機がきても生きていける地域と人がいるという存在意義がはっきり見えるような活動を続けていきたい。■

〔注1〕ビジネス・プロセス・アウトソーシング(BPO) 海外企業から事務処理などを請け負うビジネス。これまでは欧米企業のコールセンターが主流だったが、最近は米国の医療・保険サービス(患者の名前、病名を米国人医師が口述した診断内容をドットカンで聞き取り文字起こす。記録はすぐに米国に送り返す)や、銀行・企業のデータ処理や翻訳など業務は幅広い。特に米国で景気の低迷が強まるなか、人件費の安いフィリピンへの委託が増えている。海外で看護士をめざす人が多いため、看護士資格をもつ人材も確保しやすいという。フィリピンビジネス・プロセス協会(BPAA)によると、2012年の情報技術関連の総売り上げは134億ドル(約1兆2500億円)と国内総生産(GDP)の6%に達した。雇用創出では、2012年で77万人の同産業の雇用者は2016年には130万人に増加する見通し。初任給は平均1万5000ペソ(約3万円)と高く、GDPの7割を占める個人消費を刺激すると予測されている。日本経済新聞 2013年2月1日

〔注2〕カラバソン工業団地 マニラ首都圏の東部から南部にひろがる5つの州(カピタラン・バタングラス・リサルタケンの頭文字をとった総開発面積315ヘクタールの経済特区。1997年に操業開始。日本政府の開発援助が多くのプロジェクトに運用されたが、カピテ州の火力発電所の公害やバタングス港湾施設建設による漁村の立ち退きなど、操業当初から多くの問題を残した。

〔注3〕コミュニティ主導型開発(top-down) 主に世界銀行が中心となっており、90年代後半から推進してきたアプローチ。コミュニティ・エンパワメントを通じて末端のガバナンス能力や地方政府とコミュニティのつながりを強化し、貧困削減を促すことを目的とする。特徴として、中央政府から地方政府を介さずに直接コミュニティに資金供給すること、マルチセクター・アプローチであること、コミュニティ自らがプロジェクトの立案・実施・維持・管理まで担うこと、などがあげらる。

〔注4〕条件付き現金給付(cash) 90年代からラテンアメリカ諸国を中心に広がった社会保障制度。子どもを学校に通わせたり定期的に保健所につれていくことなどを条件に政府が貧困家庭に金銭を給付するというのが一般的な形態。貧困の世代間連鎖を断ち切ることを主目的とする。

| 【資料1】フィリピンの労働・賃金・生活 |                                                                                     |
|---------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| 労働人口                | 3780万人<br>(そのうち完全失業者440万人、不完全雇用1620万人)<br>〔国家統計局2012年4月より〕                          |
| 失業率                 | 7%<br>(インドネシア6.6%、マレーシア3.1%、ベトナム2%、日本4.5%)<br>〔世界銀行発行フィリピン経済レポート2012年12月より〕         |
| 生活費・賃金<br>(首都圏の場合)  | 1家族が1日必要な生活費1017ペソ(約2034円)<br>最低賃金446ペソ/日<br>(約892円、1日の必要生活費の44%)<br>〔IBONデータバンクより〕 |

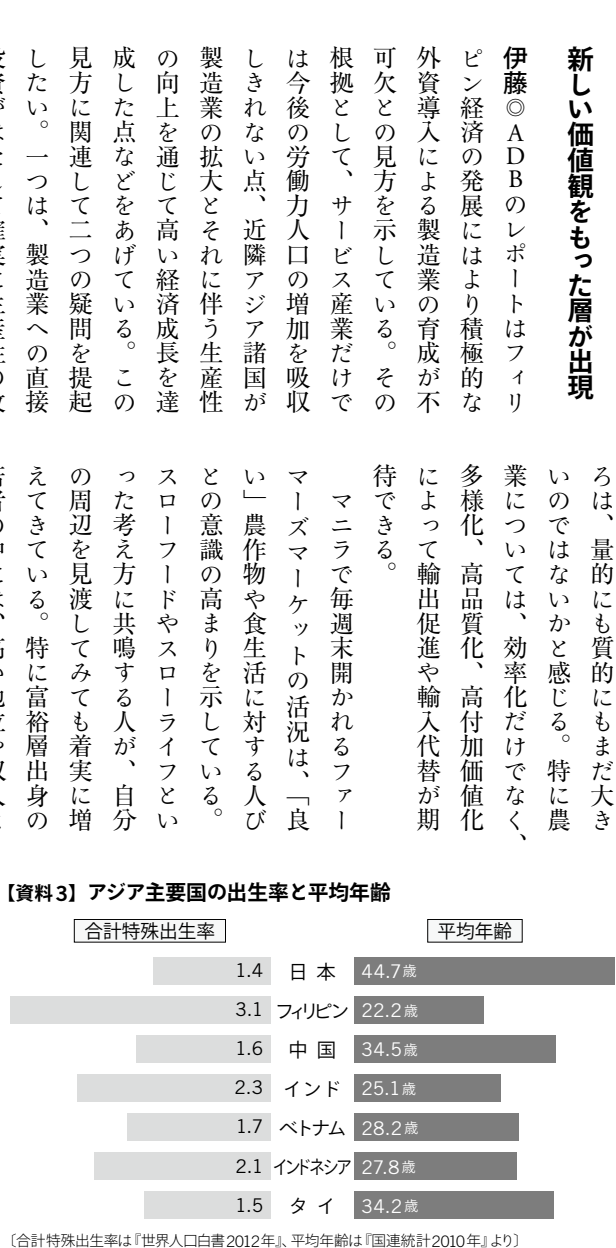
| 【資料2】海外に住むフィリピン人 |                                                                  |
|------------------|------------------------------------------------------------------|
| 海外に住むフィリピン人      | 1250万人<br>(米国342万人、中東240万人、マレーシア90万人、日本35万人)<br>〔ウィキペディア2012年より〕 |
| 送金総計<br>(2012年)  | 214億ドル<br>(過去最高でGDPの13.5%、前年比6.3%上昇)                             |

新しい価値観をもった層が出現

くのか？ネグロスでもオーガニック・ブームは富裕層だけに留まっている。トレンド的なものに留まるのか、農村・農民までつながることができるのか。APLAが共に活動している農民たちはこうした新しい状況が生まれても常に置き去りにされている、と感じるのだが。

**赤石**◎私は以前フィリピンの都市部で貧困層の人たちと仕事をした経験があるが、やはり都市と農村の隔離を感じた。都市部では半年以上の契約の仕事しかない。皆、

【資料3】アジア主要国の出生率と平均年齢





製糖工場近くで遊んでいた子どもたちと談笑。



## これからを生きるために学んだこと ——日本とネグロスの若手農民の交流

吉澤真満子／よしざわ・まみこ  
APLA事務局長

2013年2月11日。30〜40代の農民12人がマニラ空港に集まった。一般社団法人BMW技術協会が主催する「カネシゲファーム視察ツアー」。4泊5日のネグロス島への旅が始まった。BMW技術協会のメンバーである農民に加えて、これまでAPLAが福島で活動を共にしてきた二本松有機農業研究会から若手農民2名が参加した。

### ルーラルキャンパス・地域循環フクシマ・ネグロスを語った

今回のツアーの目的はカネシゲファーム・ルーラルキャンパス（KFRC）の訪問。単に農場を視察するだけではなく、日本とネグロスの農民の交流を意識した企画となった。BMW技術を中心に循環がすすむ農場を歩いて回り、バイオガスエンジンによる発電やラムポンプ（自動揚水器）の適正技術を見たり、豚、鶏、アヒル、ヤギ、七面鳥などたくさん動物と野菜と植物と人間が一体となっている様子を見学した後は、なかなか日本ではできない体験を！ということで、豚の解体から始まりレチョン（豚の丸焼き）と一緒につくった。10〜20代のKFRCの研修生た



豚の解体。熱湯で洗って表面をきれいにする。

ちが、ものの見事に豚を解体していく様子を眺め、息を絶やすための一刺しと、豚の皮を剥ぐ作業は日本からの参加者も体験させてもらった。生まれたばかりの子豚の去勢も体験した。今は分業化が進み、なかなか日本ではできない作業だ。さらに今回は、農場のセミナーハウスでルーラルキャンパス（農民学校）を開催。日本とネグロス側からそれぞれがプレゼンテーションをおこなった。

BMW技術協会理事長の伊藤幸蔵さんからは、山形県置賜地区で取り組む地域

循環の話聞き、福島県二本松市から参加した大内督さんと近藤恵さん、そして大熊町から山形県高島町へ避難をしている鎌田泰行さんが、東日本大震災の津波や原発事故の経験話を話した。ネグロス側からは、なぜネグロス島が「砂糖の島」になったのか、スペインの植民地時代までさかのぼり、自然豊かな森の中で生きていた人びとが、どのように搾取、管理、抑圧されていったか、そして、その間には、自由を勝ち取るための人びとの闘いが並行してあったことも聞いた。

ネグロスの参加者にとっては、テレビや空中写真でしか知らなかった震災の生の声、体験を聞くことができた。同じ「福島」といっても、浜通り、中通りで状況が違うこと、その状況下でのジレンマもそれぞれであること知り、原発は必要ないという日本からのメッセージを受

れていたと考えている。そもそもAID財団は、ネグロスにおける大土地所有制度のなか、「人びとに耕す土地を！」と、農地改革運動として、土地獲得（ファームロット運動やその後の生産・販売の活動もしてきた。しかし、常に住民の声として上がるのは水の問題であった。「技術」の重要性の議論も昔からあったそうだが、農民を支援する人たちにとって、教育や生産活動の実践に比べると、技術導入に関する優先順位は低かった。しかし、地主との闘いや仲間どうしの争いで、様々な活動がうまくいかなかったとき、AID財団は技術に特化した農民支援を始めていく。今ではラムポンプ以外に、山間部でも活用できる技術として、レモングラスのオイル抽出器、バイオガスプラント、もみ殻ストローなど様々な適正技術を開発している。

こうしたプロセスのなかでAID財団が開発してきた技術は、ともすると技術開発の専門家が陥るような、高額で特殊な部品や技術を用いて一部の人しか活用できない技術ではなく、代替技術とはいえメンテナンスに手間がかかったり故障した後専門家でしか修理できない機械を用いる技術でもなく、「誰でも、地域の人たちが使える技術」を創りだすことを目的としている。この話を聞いていて、いかによい技術であったとしても、何を目的にどう活用するのかわか、その技術の生かされ方が変わってくることを実感。BMW技術の実践者たちも技術を推

進する方たちとして、そうした議論は重ねられてきていると思うが、「BMW技術、AID財団、KFRCのめざしているところは同じなんだよね」という伊藤理事長の感想が印象に残った。

### 「ネグロス」が教えてくれたこと

最後の晩、3日間を振り返り、参加者それぞれが感想を述べた。今の自分の立ち位置を振り返り、ネグロスで学んだこと、参加者同士で語り合い刺激し合ったこと、自分自身が生きていくうえで大切にしたいことなどを語った。その中でも何人かの人が話したことが「子どもの笑顔とエネルギーが印象的だった」ということであった。旅の間に訪問したスラム街の子たちが、私たちに向かって見せた笑顔やたくましく生きる姿。別の場所では出会った小学生たちも、外国から来た私たちに興味深々に話しかけてくる。「ネグロスの子どもたち、元気だね」という一方で出てきたのが「日本の子どもたちがこんなに笑うところを最近は見ない」ということ。子どもたちが笑わない社会とは一体何なのか。「明日をどう生きるか」のネグロスと「明日死なないために」の日本。自分たちも周りの人たちをネグロスの子どもたちのように笑わせた。そのために何ができるか……。

大熊町から避難している参加者が最後に「自分もネグロスの子どもたちのような輝きを失わないようにしたい」と話した。私たちが忘れそうな大切なことを改

け取った。また、KFRCの研修生たちは、日本でBMW技術を実践し、「農業は楽しい」と自信を持って働いている若い農民たちが自分たちの農場に来てくれたことを喜び、自分たちの励みにした。一方、日本の参加者は、ネグロスの歴史を知り「今まで全く知らなかった……」と新たな学びの機会を持ったと同時に、福島状況を改めて聞き合うことも実現できた。

ネグロス島に植民地時代にもたらされた砂糖キビの単一栽培は、人びとから自然の多様性を奪い、自分たちの食べものをつくる土地を収奪し、奴隷意識を植え付けていった。「長年蓄積されたこの歴史のなかで、今、KFRCがやろうとしていることは、多様化を失った土地に循環を戻すこと、そこで人びとが共に生きていくこと、銃を鎌にかえて闘うことで、そうした行為が、自分たちだけではなく、地球環境すべてに影響していくのだ」。

KFRC代表のアルフレッドさんのこのメッセージは日本とネグロス、それぞれの参加者の心に深く伝わったのではないだろうか。

### 誰のための技術

今回の旅のもう一つの訪問先はAID財団（オルタナティブで土地に根ざした開発をめざす財団／ハリナNo6参照）。KFRCにラムポンプを設置してくれたネグロスのNGOだ。代表はオランダ人のオウカ・イグ



KF-RCの研修生・スタッフと。

めてネグロスから教えてもらった。「日本は経済的には豊かになったが人びとは満たされていない。僕たちはこれから何をしたらいいのか」参加者の一人がアルフレットさんに質問をした。「仲間が集まるとことん話し合い、そこから出てきたアイデアを実行していくこと。答えは外にあるのではなく、自分たちの中にしかないのだ」と答えがあった。先行きが見えない時代だからこそ、同じ志を持つ仲間が集まって何かをしていくことの大切さを、ツアーを終えて改めて感じている。■

〔注〕BMW技術：バクテリア（微生物）ミネラル（造岩鉱物）ウォーター（水）の略。バクテリアとミネラルの働きをうまく利用し、土と水が生成される生態系のシステムを人工的に再現する技術のこと。



03

photo essay  
from Thailand

## 微笑みの国から No.2

平河 夏／ひらかわ・なつ  
一児の母、タイ・バンコク駐在3年目

## きれいごとだけでは済まない。けれど…

『微笑みの国』と聞くとそこから連想するイメージはポジティブなものが多い。確かにタイの人びとは日本人から見ると新鮮なほど親切で、笑顔の分量も圧倒的に多い。でも当然のことながら不機嫌を隠さない人もいるし、タイの微笑みには13の種類があって目的ごとに使い分けられている……なんて話も聞く。

それでもタイは人びとを惹きつける。「老後をタイで」というのはざらだし、タイに転職する外国人も多い。そして何カ国もの海外駐在を経験してきた奥さんたちは口を揃えて「タイが一番暮らしやすい」と言い、日本に留学経験があり且つ日本人の夫をもつタイ人女性は何の迷いもなく「このままタイで暮らしたい」と言う。

私は疑い始めている。人間が暮らしていくうえで、実はタイは色々な意味で真っ当なのではないかと。原発も某国軍事基地もない。食糧自給率は100%を超え、巨大地震が起きる可能性も格段に低い。細々としたリスクは日常に転が



国鉄ウォンエンヤイ駅構内…。ホームに屋台も犬もバイクも何でもアリ。

っているが、それは自衛が可能だ。

タイの善し悪しの現状を知ったうえで「母国で暮らしていきたい」と率直に言える友人を羨ましいと思う私は、日本のよさを軽視しすぎているのだろうか。

01

カカオ キタ  
kakaokita

カカオ民衆交易奮闘記

2

津留 歴子／つる・あきこ  
オルター・トレード・インドネシア社現地駐在員

日本で販売が開始された『チョコラデパプア』。生産者は「これが『我らのチョコカ』とニココリ。

## 「カカオ・キタ」加工チーム結成

パプアではカカオ収穫期が近づいてきました。現地ジャヤブラでは今季の買付けを始める準備が進んでいます。その手始めに、今季のカカオ加工チームの結成がありました。

昨年加工作業に従事したのはヤニム村の青年たちでした。しかし、今年は他の村の人も均等にリクルートしようと、「書類選考」「面接」「雇用契約」という正式な手続きを試みることにしました。しかし、これはパプア人の村社会では普通のことではありません。村では地縁・血縁友だち同士が誘いあって仕事に就くというパターンが普通です。それが、求人広告なるものが村に張り出され、希望者は「身分証明書のコピーを添付した履歴書を×月×日までに提出」と要求する、村の人びとは違和

感をもったでしょう。それでも30人ほどの応募者があり、厳選な書類選考及び面接を経て今季の「カカオ・キタ」加工チームが3月初め結成されました。

昨年加工場で働いていた若者たちは、自動的に今年も働けるわけではなく知り、がっかり。可哀そうではあります。が、「カカオ・キタ」代表のデッキーさんも心を鬼にして、若者たちに事業の枠組みの中での仕事を自覚させるためにあえて契約という近代的要素をパプア社会に取り入れてみようとしたのでしよう。

試用期間は1ヵ月。この期間に就業規則に違反したり、勤務態度が悪いものは容赦なく補欠の候補者と換えるそうです。そして、加工場で働くスタッフはすべて銀行口座を開設し、給料は振り込み制に。給料日になると、母親が息子からおカネをもらいに加工場の周辺にやってくるという光景がありました。これからは銀行前で待ち合わせなければなりません。

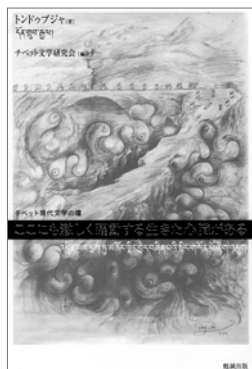
自然の中で束縛されずに伸び伸び生きてきたパプアの人びとにとって、規則や契約の中で仕事するということは何を意味するのでしょうか。今季の彼らの仕事ぶりを見てみたいと思います。

04

アジア現代文学 Asian Contemporary Literature ARE-KORE | 02

## 『ここにも激しく躍動する心臓がある』

トンドゥブジャ [著] チベット文学研究会 [訳]、勉誠出版、2012年

大野和興／おおの・かずおき  
日刊ペリタ編集長

中国支配に抗するチベットの人びとの焼身自殺があとを絶たない。2009年以降1000人を超えたという数字もある。そんな人びとの苦悩はどんな文学を生んでいるのだろう。そんな思いに引きずられるように本書を手にとった。著者トンドゥブジャは1953年に東北チベットで生まれ、85年、32歳で自死している。訳者を代表して本書の中で解説を執筆している大川謙作さん（東京大学総合文化研究科学術研究員）は著者を「チベット語によるチベット現代文学の創始者」と紹介している。

著者は北京の中央民族学院（現・中央民族大学）で修士課程まで学んだチベット民族の知識人で、作家であると同時に詩人・歴史家でもある。本書は著者の初期から自殺直前までの作品を収録しており、標題となった「ここにも激しく躍動する心臓がある」は自殺の4ヵ月前に書かれた中編の詩である。チベットの人びとが

たどった歴史を踏まえながら、民族の誇りを詠い、「チベットの誇り」という青雲も、南の地から確かにたちのぼってくる／亡命した者も留まった者たちも立ちあがるだろう／絶望を脱した印象的な短編にみられた明るい希望は、この詩には見られない。詩の中で「多くの耳に今なお響きわたっているのは―未来の生活」を詠いあげながら、そこにあるのは深い絶望である。みずみずしい感覚で綴られた彼の作品の中で突然、党中央の指導の素晴らしさをたたえる短い文節が混じることがある。チベット民族の誇りと未来を語るためのやめぬ戦術だったのだろうか、この詩を読むなかで納得させられた。「命した者も留まった者たちも立ちあがるだろう」と詠ったとき、彼は明らかに一線を越えた。大川さんの解説にあった「チベット語によるチベット現代文学」という規定の意味が浮かび上がる。中国には漢語で小説を書く一群のチベット人がいて、それもチベット文学と呼ばれている。これは「チベット語によるチベット文学」なのだ。

## チベット語によるチベット文学

02

## マイストーリー ジャパン

日本に住む在日外国人たち 【第八回】

【中国（朝鮮族）金銀実さん／Jin Yinshi シン・インシ

聞き手・市橋秀夫（ハリナ編集員）



金銀実さんの国籍は中国人だが、民族アイデンティティは朝鮮族。中国東北部の吉林省・延辺朝鮮族自治州の出身。延辺には日本の植民地支配時代に多くの朝鮮人が移住した。金さんは朝鮮語、中国語、日本語のトリリンガル。家庭や学校の授業で使われていた朝鮮語、小学校から習った中国語、中学に入ってから外国語として習った日本語のいずれも堪能。今は英語になったが、金さんの学年までは日本語が必修の外国語。大学も日本語学部を選んだ。

今は延辺でも朝鮮族人口は減り、学校でも社会でも中国語の比重が重くなり、朝鮮語を自然に身につける環境は急速に失われつつあるという。金さんは現在留学生として日本の大学の博士課程に在籍。朝鮮族のアイデンティティ問題を研究している。日本での生活は通算して5年を超える。日本の良いところも悪いところもある。金さんは、日本にもいるんな人がいるなと思っている。

日中は仲良くなつてほしいと金さんは願う。距離も近いし、共通しているものも多く、切っても切れないグローバル化が進みアイデンティティが揺らぐなか、人と人との確かな信頼関係をどう築いていくか。







APLA発足以来編集長を仰せつかっていましたが、次号から大橋成子さんにバトンタッチすることになりました。肩の荷がおり、ほっとしています。編集委員として楽しく頑張りますので、よろしくお願いします。(大野)

今号から編集を担当します。よろしくお願ひします。今号は伊藤徹さんの協力を得て、フィリピン経済を特集しました。ネグロス島から帰り、久しぶりに日本に長期滞在してあらためて感じるのは、マスメディアを含め、アジアの情報がほとんど報道されていないこと。今後も様々なアジアの現状を発信したいと考えていますが、読者の方々のご意見をぜひ寄せてください。(大橋)

一昨日、共同代表の村井吉敬さんのお別れ会だった。お人柄が表れた心温まる式のなか、お仲間たちからのメッセージのなかに「まだ世界には平和が訪れていない」という言葉が何度かあった。村井先生が20年関わってこられたパプアしかり、今号にはナガランド、チベットについて書かれたコーナーも。そして、今の日本も平和だといえるのだろうか。色んな思いが巡った20号の編集作業だった。(吉澤)

今号の編集作業中にAPLA共同代表の村井吉敬さんがご逝去されました。村井さんは『ハリーナ』の編集委員も務めてくださっていました。

この場を借りて、村井さんへの感謝の意を捧げるとともに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。ハリーナ編集委員一同

## ハリーナ

HALINA

2013年5月号 vol.02-no.20  
2013年5月1日発行

〔編集長〕  
大野和興

〔編集者〕  
大橋成子、吉澤真満子

〔表紙写真〕  
長倉徳生

〔デザイン・制作〕  
十年舎

〔編集・発行〕  
特定非営利活動法人APLA  
(APLA/あぷら:Alternative People's Linkage in Asia)

〒169-0072  
東京都新宿区大久保2-4-15  
サンライズ新宿3F  
tel. 03-5273-8160  
fax. 03-5273-8667  
e-mail info@apla.jp  
URL http://www.apla.jp

〔印刷〕  
株式会社セイズ

### 事務局の動き(2013年2月～4月)

|            |                                                                                            |
|------------|--------------------------------------------------------------------------------------------|
| 2月 2日      | 「福島百年未来塾」第6回を開催しました。                                                                       |
| 2月 2日～11日  | 東ティモールでセミナー「農民による自立的・安定的な地域づくりのための協同」を開催するため、長野県伊那市にあるグリーンファームの小林会長に現地を訪問していただき、野川が同行しました。 |
| 2月 5日      | 学芸大学付属高校の校外授業で吉澤がAPLAの話をしました。                                                              |
| 2月 5日      | パルシステム埼玉・平和募金贈呈式に赤石が参加しました。                                                                |
| 2月 9日      | APLA理事会・評議員会開催。                                                                            |
| 2月 11日～15日 | 一般社団法人BMW技術協会主催「カネシゲファーム視察ツアー」に吉澤と赤石が同行しました。                                               |
| 2月 16日     | 2013/パルシステム東京「エコ&ピースday!「いのちにつながる選択を!」3.11を忘れない脱原発・核のない世界へ」に出店しました。                        |
| 2月 18日     | TPPに反対する人々の運動の寄合に吉澤が参加しました。                                                                |
| 3月 6日      | BMW技術協会・若手幹事会に吉澤が参加しました。                                                                   |
| 3月 11日     | 二本松有機農業研究会と「福島百年未来塾」の振り返りと今後の活動に関する協議に、秋山、疋田、大橋、吉澤が参加しました。                                 |
| 3月 11日～15日 | 第6回BMW技術基礎セミナーに、吉澤、野川、赤石が参加しました。                                                           |
| 3月 22日     | 一般社団法人互惠のためのアジア民衆基金の理事会(於韓国)に秋山が参加しました。                                                    |
| 3月 29日     | BMW技術協会・若手幹事会に吉澤が参加しました。                                                                   |
| 4月 7日～17日  | 東ティモールへ野川が出張しました。                                                                          |
| 4月 13日     | APLA理事会開催。                                                                                 |
| 4月 20日～21日 | アースター東京2013にATJと共同で出店しました。                                                                 |
| 4月 27日     | 東京新宿区・経王寺にて映画『カンタ！ティモール』上映会を、経王寺、アーユス仏教国際ネットワークとの共催で開催しました。                                |

### 事務局からお知らせ

#### APLA会員限定のメーリングリストを不定期に流しています。

まだ登録されていない方はぜひ登録してください(info@apla.jpまでご連絡ください)。

#### 「福島の子どもたちに届けよう バナナ募金」へ引き続きご協力をお願いいたします。

いくつかの保育園、幼稚園から卒園前に園児の皆さんよりお礼のメッセージが届きました。バナナ募金のホームページでもリニューアルし、写真でお礼が見れるようになっています。ぜひご覧いただき、引き続き募金のご協力もお願いいたします。

- 現在20施設、約1700人の子どもたちへ届けています。

#### 以下の呼びかけに賛同・参加しました。

- シンガポール交渉にて、米国の「日本の参加問題」発言リーク！日本はTPP交渉に参加しても、交渉内容に何の影響も与えられない！TPP参加表明を絶対に許さない！緊急声明文【賛同】※個人賛同であったため、共同代表秋山・疋田、事務局長吉澤で賛同しました。

#### APLA会員限定のメーリングリストを不定期に流しています。

まだ登録されていない方はぜひ登録してください(事務局info@apla.jpまでご連絡ください)。



グループに分かれて真剣に議論中。

グループに分かれて真剣に議論中。今回の課題は、今後の課題は、関心を、どのようにして持続し、さらに具体的な動きにつなげていくことができるか、という点に尽きます。具

※このプログラムは、生協総合研究所「アジア生協協力基金」の助成金を受けて実施しました。

（注）長野県伊那市で1994年にオープンした民間経営の農産物直売所。現在では、年間来場者数57万人を越えている。「農協や行政に頼らない、生産者が主人の直売所」、日本一おもしろい直売所としても有名。  
公式サイト: <http://www.green-farm.asia/>

From East Timor【東ティモールより】

### 「協同」についてのセミナーを開催

2013年2月、オルター・トレード・ティモール社(ATT)の「コーヒー生産者グループ」を対象に、単にま

歩を踏み出すため、長野県にある産直市場グリーンファームの小林史磨会長に東ティモールの訪問いただき、「農民による自立的・安定的な地域づくりのための協同とは」と題したセミナーを開催しました。当日は、エルメラ県内のコーヒー生産者グループリーダー約30人が参加。小林会長の終戦直後から現在に至るまで



講師の小林会長と参加者全員で記念撮影。

### 追悼 村井吉敬さんを偲んで

秋山眞児／あきやま・なおえ  
APLA共同代表

村井吉敬さんのご逝去は、APLAにとっても私個人にとっても大きなショックであり、悔やまれてなりません。日本ネグロス・キャンペーン委員会を改組してAPLAを設立しようとなったとき、

ありましたが、その際には温厚な語り口の中にある鋭い指摘によって、自分の考えをより深く、客観的に捉え直す貴重な機会だったのです。

自身が実現したい夢を出し合おうということになり、村井さんの夢は「インドネシアの伝統的木造船船で、ネグロス・北ルソン・東ジャワ・東ティモールを数ヶ月かけて巡って各地の農漁産物の物々交換式民衆交易をしよう」でした。木造船船を借りる調査もしてくれたのですが、具体化するまでには至りませんでした。村井さんのこの夢には、村井さんがAPLA/ATTに関わってくれた思いが凝縮しているといえます。ですからこの夢を夢のまま終わらせるのではなく、APLA/ATTが存続する限り、実現すべき夢として掲げ続けていきたい。それがAPLAとして、村井さんへの心からの感謝の印だと思っています。



村井吉敬さんのご逝去は、APLAにとっても私個人にとっても大きなショックであり、悔やまれてなりません。日本ネグロス・キャンペーン委員会を改組してAPLAを設立しようとなったとき、